

172. 高句麗の都平壤 高麗の都開城を訪ねて — 前編 —

霧の平壤駅に降り立ったのは1989年11月23日午後5時ちょうどであった。北京から約24時間におたる長い列車の旅を終え、ようやく到着した目的地である。数年におたる訪朝への想いとそれがやっと実現したという感激で、霧にすっぽり包まれた平壤の街が何か幻想の世界に感じられた。この時から平壤周辺の高句麗時代の遺跡、平壤から約135km南々東にある開城の高麗時代の遺跡を見学する1週間のめまぐるしい日程が始まったのである。

この訪朝については、滋賀・京都・大阪・奈良在住の考古学・法制史・歴史地理・建築史・美術史等を専攻する研究者から成る日朝文化学術研究会（代表 京都市埋蔵文化財研究所長 杉山信三）が、高句麗の都城を中心とした遺跡について実地に現地を訪ね、当地の研究者とも交流してわが国にも強い影響をおよぼした高句麗文化について意見をかわし、今後の研究を高めると同時に友好をも深めたいと数年前から企画してい

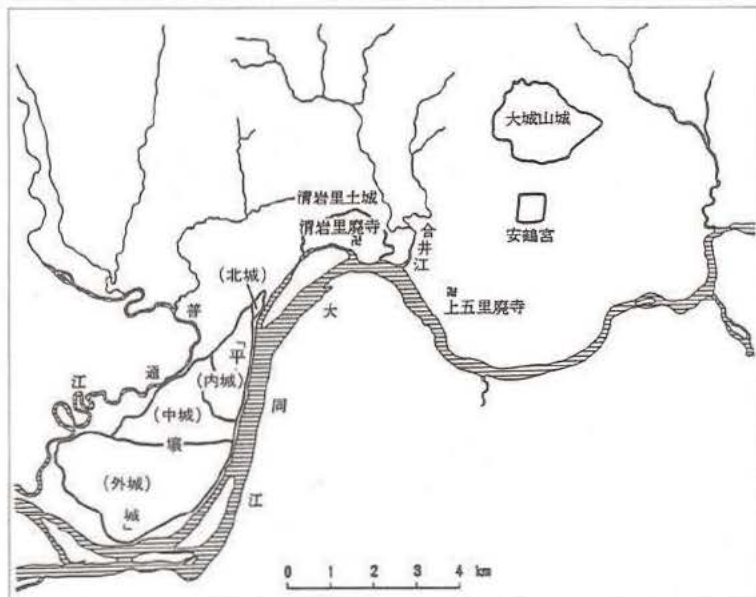
た。毎月研究会を重ねる一方、関係機関に再三はたらかけていたところ、京都大学教授上田正昭先生の御尽力もいただき、このほど朝鮮社会学者協会からの招請によりようやく実現したものである。私も日朝文化研究学術友好訪朝団（団長代行 滋賀大学教授小笠原好彦、副団長 関西学院大学教授林紀昭、秘書長 京都市埋蔵文化財研究所 堀内明博）の一員として参加することができたため、見学した主な遺跡の概略や感想、問題点等について簡単に紹介してみたい。なお、遺跡見学はいずれも社会科学院考古研究所長朱栄憲先生、朝鮮社会学者協会李京植先生の御同道を得、御説明いただいた。

1. 平壤城

朝鮮半島北部から現在の中国東北部の一方を勢力下においていた高句麗は、その都を桓仁地方から集安に移し、広開土王（好太王）の子長寿王の15年(427)平壤に遷都した。『三国史記』ではこの時の都城を平壤城とよんでいる。平壤にはこの遷都以前からある程度の都城は造られていたようで、『三国史記』には東川王21年(247)、「王以丸都城経乱、不可復都、築平壤城」とか、故国原王4年(334)には「増築平壤城」、あるいは同41年(371)、「百濟王率兵三万、來攻平壤城」という

記事が散見され、副都の性格をもつ都として南方の平壤の地に都城の建設が進められていたようである。そして長寿王15年(427)に「都を平壤に移」したが、陽原王8年(552)の「長安城を築く」という記事の後、平原王28年(586)「都を長安城に移す」という記事によって再び都が遷されたことが知られる。この長安城も平壤の地に造られたもので、これも平壤城とよばれた。このため、427年に遷都された最初の平壤城と586年に再度遷された平壤城(長安城)が現在知られる遺跡のどれに符合するか幾つかの説が出されている。

これに該当する遺跡としては、現在大半が平壤市街地となっている「平壤城」、その東北部にある清岩里土城、さらにその東にセット関係とし



平壤市周辺の遺跡（参考文献③による。一部加筆）

て存在する安鶴宮・大城山城である。

「平壤城」は大同江と普通江に囲まれた地に外城・中城・内城・北城からなる南北に長い都城で、南部に広がる外城には碁盤目状の街区が設けられたとみられている。中城・内城・北城は丘陵を利用したもので、特に王宮に当る内城と北端の北城は丘陵の斜面が急峻な崖となり、東側は大同江に接して自然の要害となっている。このように、「平壤城」は朝鮮都城の主流である山城と中国の都城制をうまく合体した都城であると考えられている。しかし、大城山城や山城子山城など山城の具体的な施設を明らかにし、平地の王宮との具体的な機能関係を検討した上での比較でないと単に立地からの比較のみでは正鵠を得ることはできないであろう。

現在、外城と中城はすでに市街地となり往時を偲ぶことはできないが、内城の大半と北城は史跡公園となっている。丘陵端部には城壁跡が残り、七星門や玄武門などは復原されて整美な姿を見学することができ、内城北端の乙密台やその周辺部には城壁も高く、長く復原されていた。乙密台から東北方を見ると、清岩里土城や大城山城を遠望することができた。

この「平壤城」からは古くから5世紀前半以降の瓦が多く出土しており、ここを初期の平壤城にあてる説もあったが、城壁の壁石に文字の陰刻された幾つかの刻字城石のうち「乙丑年」と「丙戌」の年代が569年、566年に当るとする共和国の崔叡林氏・鄭燦永氏・蔡熙国氏等の御研究により、現在では「平壤城」を586年に移され、668年の高句麗滅亡時まで続いた後期の平壤城（長安城）に比定する説が大方の賛同を得ているようである。しかし、5世紀前半の瓦の出土をどう理解するかという問題も残されている。

2. 安鶴宮と大城山城

朝鮮半島における都城は、高句麗の都城であった集安の国内城（平地の王宮）と尉那巖山城（山城子山城一山城）、新羅の月城と明活山城・南山城などにみられるように、平事の政務は平地に設けた王宮で執り、有事にいたれば近くの山塊に造営した山城に立て籠もり戦うという複数の施設をセットとしたものを基本とした。

安鶴宮と大城山城がちょうどこのセット関係の位置にあり朝鮮都城の典型とされている。両遺跡については古くから瓦の出土や城壁・土塁等の存在が知られていたが、1958年～1961年に金日成綜合大学により発掘調査が実施され、その後も調査が続けられた。

大城山城は西南方に開くY字状の谷を囲む尾根上に城壁をめぐるし、各所に門や将台、角楼、雉城、多くの池、食糧・兵器用の建物などが配されていた。城壁は東西2.3km、南北1.7kmの範囲を囲み、総延長7,218m



「平壤城」七星門



大城山城蘇文峰の復原された城壁



安鶴宮と大城山城（南宮東回廊より）

を測るという。発掘によって将台5箇所や20棟におよぶ瓦葺き建物等が検出され、各種の金属製品、土器、瓦などが多数出土している。

安鶴宮は一辺約620mの城壁で囲まれた王宮であるが、城壁は正方形ではなく東北角と西南角が鋭角に、東南角と西北角が鈍角となる菱形を呈する。南辺中央には南門が設けられ、内部には回廊に囲まれたひとまとまりの主要殿舎が幾つも検出された。これらは中軸線上に南から南宮・中宮・北宮と一直線に並び、さらに北宮の西側には西宮が、東側には東宮が確認され、大きく5つの建物群の存在が判明した。そして、これらはいずれも回廊によって連結されている様子もうかが

われた。最も大きな南宮の正殿が「大極殿」に相当する建物と考えられている。ここからは多くの瓦が出土しているが大城山城出土瓦と同范とみられる瓦は全くない。

そして、大城山城と安鶴宮は出土した土器や瓦等からみて同時期のものでセットとなり、これらは427年に遷都され586年まで続いた初期の平壤城であると結論されている。

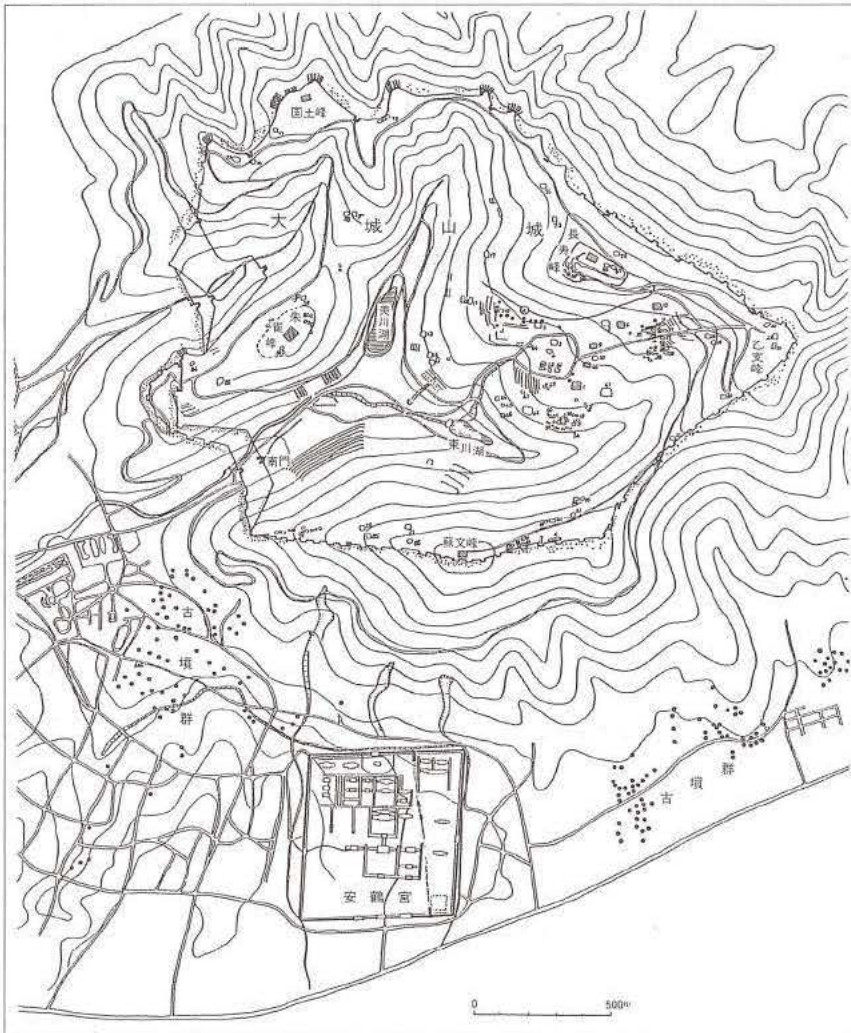
われわれは大城山城の西南に開く谷口に設けられた南門から大城山城に入っていった。そこには壁面に基づき1976年に復原された南門がそびえていたが、それは往時の南門と少しずらした地点に建てられていた。遺構としての南門は復原南門の西方約30mの地点にその基礎石が幾つか並んでいるのが認められた。南門上に登って内側を望むと、この谷は予想外に幅広く、現在は平地が広がっているが、往時、門から延びるであ

ろうメインストリートの両側にはかなりの施設の貼り付く余地があると判断された。

この後、南丘陵の頂部である蘇文峰に登った。ここからの南方・西方の眺望はすばらしく、南方の眼下には整備された安鶴宮が箱庭のごとく俯瞰でき、やや東方の畑には点々と盛りあがった古墳群も認められた。これらの南には低丘陵が広がり、その向こうには白く光って東西に横たわる大同江が遠望できた。この蘇文峰のある大城山城の南斜面は思ったほど傾斜は強くないと感じられた。

西方は逆光であり明瞭ではなかったが、かなり前方に南北に流れる合井江が、その西方の大同江に接するあたりに清岩里土城らしきもの、さらにその西南方にかすかに平壤城の北城・内城とみられる小丘および平壤市街地が認められた。

尾根に沿って城壁跡が延びているが、蘇文峰では高



大城山城と安鶴宮（参考文献②による）

さ10m前後、長さ100m前後にわたり城壁が復原され、往時の状況がよく理解される。復原されていない地点を見ると、高さ1~2m、幅5~6mの土塁が尾根上に延び、その外側には人頭大の城壁石が無数に散乱していた。この大城山城にしても、「平壤城」にしても城壁の石は思ったより小さく、安土城や彦根城の石垣の石と比べるとかなり小振りである。

次に山城内にある方形の池「鯉池」や幾つかの小さな池を見学したが、鯉池は1959年~1960年に発掘したもので、現在はきれいな水があふれていた。山城内には大小合わせて百数十個の池が確認されているという。

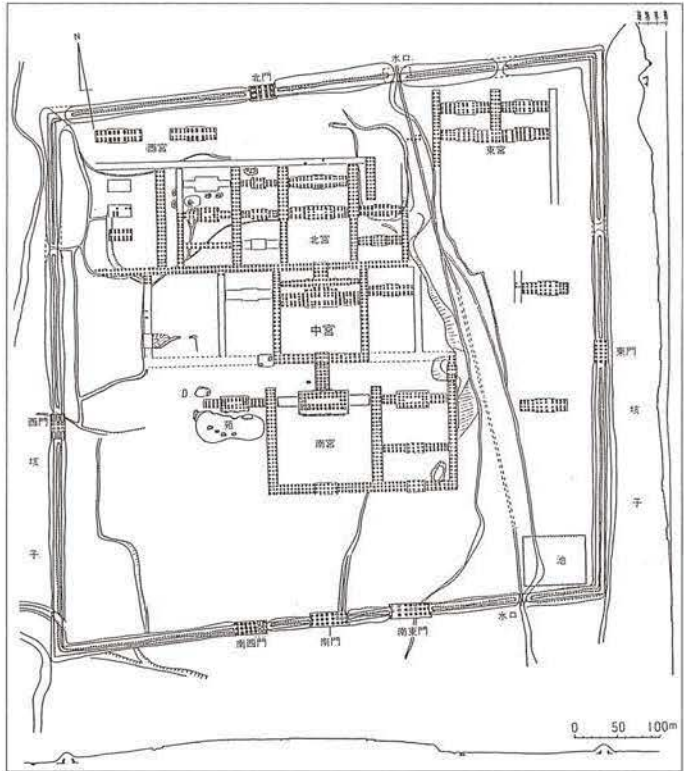
安鶴宮は大城山城の真南に位置する。南門から北を望むと正面に蘇文峰を中心とした大城山城がどっしりと横たわり、この両者は何らかの関係があり、それぬきにしては考えられない立地にある

と強く感じられた。南門から次第に高くなりながら北宮方面にゆるい傾斜が続く。畑の部分もかなりあるが、調査で確認されたいずれの遺構も芝が貼られ、その輪郭をたどれば遺構の配置がわかるようになっている。ほとんどの礎石は欠出し根石だけが認められたようで、柱位置はいずれも凹穴となって並んでいる。南門の東西には高さ3m程の土塁が延びていた。

制約された短い時間で全域をめぐることはとうてい不可能で、われわれは南門から南宮の南門を経て東回廊にまわって、南宮正殿にいたり、そこから東に行き南宮東端の南北回廊の北端まで行ったが、ここから東方は5~7mの段をなして低地となり、東辺の土塁までの間は一種の谷状地形となっている。この王宮の東北隅にある東宮も一段低い地点にあり、東南隅の池の存在もこの地形からみれば妥当な位置に設けられているといえる。

先述のように大城山城で出土する瓦も安鶴宮で出土する瓦も5世紀前半から6世紀後半に限定されるものと位置づけられているが、日本の研究者の多くは大城山城出土瓦には5世紀前半にさかのぼる瓦の存在は認めるが、安鶴宮出土瓦は5世紀までさかのぼるものはなく、古くみても6世紀前半まではさかのぼり得ず、7世紀末ないし8世紀あるいは高麗時代まで下るとする意見が強い。この安鶴宮については下層遺構の有無の確認も含めて、今後両国研究者の忌憚のない意見の交流が望まれる。

なお、初期の平壤城について、山城である大城山城については出土瓦からもほとんど異論はないが、平地の王宮のもう一つの候補地として清岩里土城がある。今回は見学できなかったが、この遺跡は「平壤城」と大城山城の中間、大同江の北岸にある遺跡で、南は大同江の流れを要害とし、東・北・西を弧状に土塁で囲むもので、東西約2.3km、南北約0.9kmを測る。この内部に瓦の散布する地域が幾つかあって、そのうち東部にある一画が中心部をなすと考えられていたが、1938年、日本の研究者が調査したところ、予想に反して王宮ではなく寺院が検出された。八角形の塔とその北・東・西にそれぞれ金堂を配する一塔三金堂式の寺院、清岩里廃寺である。『三国史記』や『東国輿地勝覧』『高麗史』などの記事、最近まで残っていた地名などから、この寺は498年に



安鶴宮遺構平面図 (参考文献②による)



安鶴宮東宮付近

建立された金剛寺とみられている。他の瓦散布地については未調査である。王宮としての遺構が検出されない以上、その候補地とはなしくいが、広範囲の土塁の広がりや寺院以外の瓦散布地の存在などからみて、王宮等遺構存在の可能性は十分考えられる。ここから出土する瓦の中には5世紀前半に位置づけられるとみられる瓦も含まれており、この土城を初期平壤城の王宮に考えても年代的には矛盾しない。今後の調査結果

を待つ以外にない。

大城山城の蘇文峰からこの清岩里土城方面を眺めて感じたことではあるが、今後、仮りにこの土城内で5世紀前半の王宮跡が検出されたとしても、大城山城とセットとして考えるには無理があるのではないか。なぜなら、これらの間にはこれらを分断するかのような幅100m～150mの合井江という南流する大きな川が存在するからである。川は天然の要害に利用されるのが常で、この存在は両者の連携を否定するものといえよう。

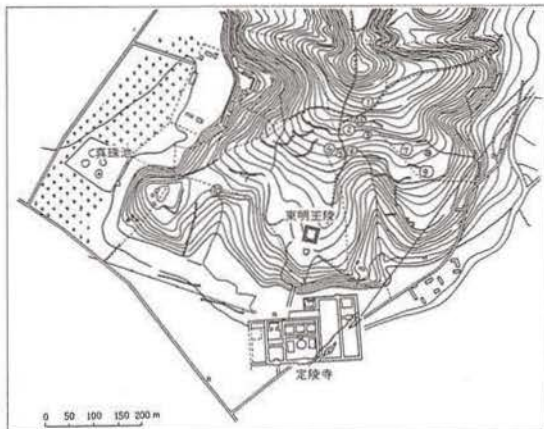
3. 東明王陵と定陵寺

平壤市街中心部から東南方約22kmにあり、低丘陵上には東明王陵を含む真坡里古墳群(約20基)が、その南側の平地には定陵寺が存在する。近接するこの両遺跡については1974年、金日成総合大学によって大々的に発掘調査され、整備されて今日にいたっている。

東明王陵の外部構造は、墳丘の基底に切石を2段以上に積んで方形にめぐらし、その上に封土を四角錐形に築いたもので、内部構造は横穴式石室であるが、玄室内全面は蓮華文で装飾されていた。石室内からは金製および金銅製王冠の遺片である歩揺や珠玉の耳飾等が発見された。

この外部構造は集安の4世紀後半期に位置づけられる太王陵や5世紀初頭の將軍塚にみられる積石塚から4世紀末～5世紀初頭の牟頭婁塚にみられる封土墳へ移行する過渡期の形式を示すもので、5世紀前半の平壤遷都前後の高句麗古墳の特徴をもち、古墳の構造からも王冠の遺片の出土からも王陵であるとされる。そして、四神図が描かれるのは6世紀以降であり、この時期は通常人物風俗画が描かれるのに蓮華文のみの描写は特異な事例といえ、これは主人公の生活描写ができなかった事情、すなわち、被葬者の死後長年月が経過したためであろうとされ、4世紀後半の故国原王から5世紀前半の広開土王まで平壤地方で死亡した高句麗王ではないため、この墓は平壤遷都の際、高句麗の始祖王である東明王の陵をこの地に移葬したものと結論されている。この「移葬」については後の高麗時代に都を開城から江華島、さらに開城へと遷した際、高麗の始祖王王建の陵墓をその都度移葬した例もあり、その考えの論拠の一つにあげられている。

この東明王陵について日本の研究者からは492年に死亡した長寿王の陵墓ではないかとする意見も出されているが、この古墳の型式編年が5世紀前半に限定できるのか、それが5世紀末まで幅が広がるものなのか、壁画の理由はどうなるのか、また、寿陵という概念で説明しきれぬのか、などさらに検討の要があろう。また、報告書では蓮華文が主題に描かれた壁面古墳として集安の散蓮華塚や亀甲塚などがあげられているが、



東明王陵と定陵寺(高寛敏「高句麗東明王陵の発掘調査」『考古学ジャーナル』No.148, 1978年による)

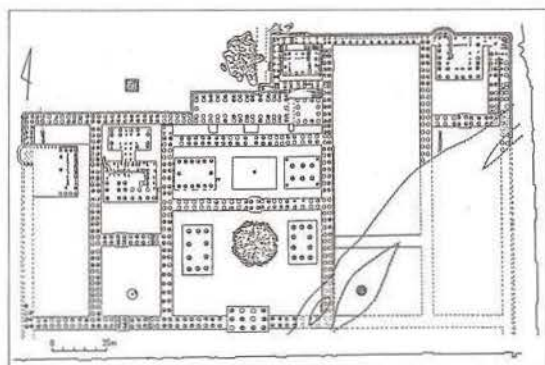


東明王陵

これらの古墳もこの東明王陵と同様の理由によって描かれたものであろうか。

定陵寺は東明王陵のある低丘陵が南へだらだらと下り、それが尽きるあたりから南側の平地に造営された寺院である。これだけ広範囲に寺院遺構を検出した例は共和国では初めてのことである。

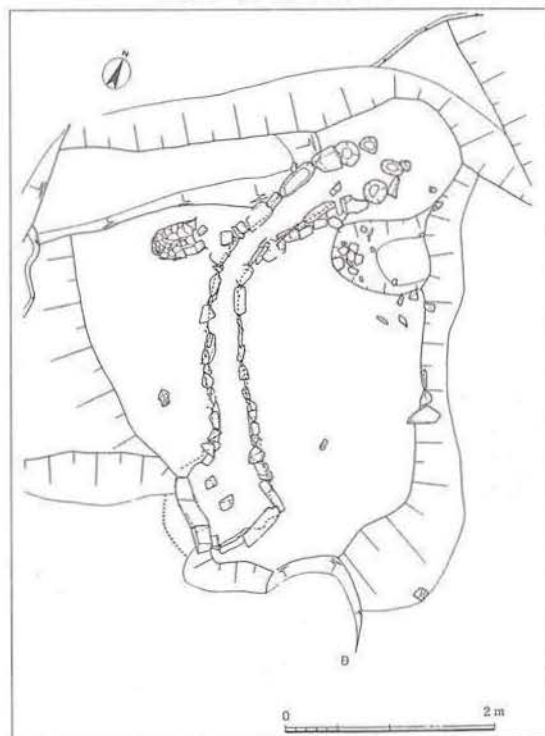
東西223m、南北132.8mにわたり伽藍は検出され、さらに南に広がっているようである。南北の回廊によって大きく5つの空間に分けられ、それらは東西の回廊によってさらに幾つかに仕切られている。中心伽藍は中央部にあって、その南半に回廊に囲まれて八角形の塔とその東西にそれぞれ金堂があり、その北側にまた回廊に囲まれて、中央に金堂、西に経蔵、東に鐘樓があり、さらに回廊をへだてた北側に大きな講堂が配され、その背後にオンドル施設のある立派な建物がある。これらの中央区の東側は河川の氾濫により遺構はかなり欠失しているが、東北隅の一角にはこれもオンドルのある広い建物や南北の細殿が検出されている。西側の北部には厨房かと想定されている複数の建物があり、この区域から「定陵」「陵寺」「寺」「衆僧」「高句麗」などの銘のある土器が多数出土し、これによりこの寺



定陵寺遺構平面図（参考文献①による）



定陵寺（中央区北から）



大津市穴太のオンドル遺構（「穴太遺跡」(弥生町地区)発掘調査報告書、大津市教育委員会1989年による）

院が「定陵寺」と称されていたことが判明した。

そして、この定陵寺の「一塔三金堂」式の伽藍配置を清岩里廃寺（報告書では『三国史記』にみえる498年に建立された金剛寺に比定）よりも古い時期におき、『三国史記』広開土王2年（392）の記事にみえる「創九寺於平壤」のうちの一寺と推定し、東明王陵のために392年に建立された寺院と結論づけている。

中央区の北側にある金堂（北金堂）には礎石は全く残ってなく、わずかに基壇痕跡が認められたようであるが、これを金堂とするのに疑問をもつ日本の研究者もあり、もし金堂にまちがいないにしても塔および東西両金堂との間は東西に延びる回廊で画かれていて、これらは別空間に位置することになる。このため、清岩里廃寺と同様の一塔三金堂式とすべきではないという日本の研究者の意見もあり、この伽藍の性格付けについてはなお吟味の余地があるように思われる。なお、清岩里廃寺の調査は幅2mのトレンチを縦横に設定し、遺構の発見された所を拡張して発掘するという調査であったため、北金堂と塔および東西金堂との間に東西回廊が存在しなかったと断定するには今一つ躊躇をおぼえる。今後の確認が待たれる。ちなみに、定陵寺の場合、北金堂南辺と塔北辺との距離は約16m、清岩里廃寺のそれは約14.5mを測る。

また、出土瓦をみると、日本の研究者による編年観からみれば、清岩里廃寺出土瓦には5世紀前半にさかのぼり得る軒丸瓦があるが、定陵寺出土瓦には5世紀前半に位置づけられるものは認めがたく、かなり下の時期が考えられる。

この定陵寺を訪れたのは日没の時刻で、広衍たる遺跡を歩きまわると頬は寒気でピリピリと痛み、カメラのシャッターを押す手は氷のように冷たく固くなった。持参した懐炉がこの時ほどありがたく思ったことはなかった。後で聞くと氷点下4～5°の気温だったようだ。

遺構部分は芝生を貼り、礎石の欠失した部分は凹穴となり、中に根石が認められた。中央区の北端にある貴人の起居したとみられる立派な建物では当時の博敷がそのまま見られ、博と瓦で作られたオンドルも簡単な透明の覆いを設けて見られるようにしていた。大津市穴太遺跡で検出されたオンドルらしき遺構について報告書から得た図と写真を朱栄憲先生に提示して御意見を伺ったところ、それはオンドルにまちがいないく、煙道が屈曲している構造は古い時期の特徴を備えているものであるとの御教示を得た。

なお、両遺跡の近くには資料館があり、両遺跡からの出土品や写真、参考資料が展示され、遺跡の理解が深められるようにしてあった。また、若い女性の説明員に現地および資料館を丁寧に説明していただいた。

（林 博通）